

## 大和文華館蒐集ものがたり④ 万暦赤絵小壺

大和文華館々長 矢代幸雄



赤絵花鳥文小壺  
大明万暦年製銘  
景德鎮窯  
中国・明時代  
高さ 9.1cm・胴径11.2cm.



私は、若いうちは、陶磁器の類には甚だ無関心で、殆んど見向きもしませんでした。それが今のような焼物好きになった病みつきは、万暦赤絵からでありました。

私は、かつて画家の梅原竜三郎君の画室の一隅に、白きぢに赤や黄や紫紺色などで竜のからみ合う模様などを描いた豊麗なるシナ焼物が置いてあるのを見て、それが画室の周囲に懸っている梅原君得意の完成未完成の油画的、濃艶にして奔放なる色彩と頗る相通ずるを感じて、なるほど、これが梅原好みで有名な万暦赤絵というものだな、と思いました。その頃、万暦赤絵という名前は、志賀直哉君の「万暦赤絵」という文学作品もあって美術好きの青年仲間にも知れて来つゝあつて、まだろくに本物を見たこともない私どもも、その美しい名前につられて、一種のあこがれを寄せる、といった時代でありました。

私がこの万暦の愛すべき小壺に初めて出逢ったのは、もう三十年近い昔の話になりますが、それは北京にさる名族を訪ねた時でありました。その夜、同家の主人である長身温顔の見るからに貴公子風の中国紳士に迎えられて、きらびやかな広間でいろいろな名品を見せられ、蘭燈の下雅談閑談尽きず、私は時の移るのを忘れていました。そのうちにこの彩り多き小壺が取り出された時、覚えぬ眼を見張りました。満堂の佳器、この一品が出現するに及んで、顔色なきが如く、私は世にもこんなに引きしまった形の、こんなに色美しい万暦赤絵があるものか、と全く驚歎するほかはありませんでした。

越えて数年、御影の白鶴美術館に明代陶磁の特別展覧会が催されたので、早速訪れてみると、そこで、北京以来忘れんとして忘れることの出

来なかったこの小壺に、はからずも再会したのでありました。あの可愛いものが、いつの間に日本に渡って来ていたのか、と私はなつかしさにたえず、さて周囲を見廻すと、さすが名品揃いの白鶴美術館であつても、その際にも、私の眼には、この小壺は珠玉の如く群を抜いて、あざやかな光彩を放ち、周囲に輝くが如くに思われました。その後、戦争の混乱は、これほどの絶品も流転の運命に弄ばれたものの如く、ある日、また偶然、今度は市場においてこの小壺にめぐり合いました。無論、飛びつくようにして、私がこのあこがれの小壺を大和文華館のために購入したこと、言うまでもありません。私がこの小壺を中国に初めて見てより、特に追いかけたわけでもないのに、この何年にもわたっての私の鐘愛の品が、遂にそれを最も愛する者の手に帰したということは、おのずから深き因縁がこの小壺と私との間にあったためか、と考えるほかはありません。

見れば見るほど美しいのは、その多彩なる色彩であります。そしてすべてこれ等の多彩をくっきりと生かし出しているものは、雪白なるきぢ寒いほどに清潔なる、玉肌であります。高台裏はその雪白のきぢ丸出しで、そこには濃藍の青花をもって、二重円郭「大明万暦年製」という款が大々と書き入れられてあります。天然にも時に貴重なる宝石を生じ、その稀代の光彩に我々はひたすらに驚歎するを禁じ得ない場合がある如く、重たいほど豪華に堆積したる大明の文化が煮つまって、そのエッセンスを結晶させたようなこの万暦赤絵の絶品には我々はたゞ「脱帽」して敬意を表する以外はありません。

季刊 美のたより No.8

昭和43年12月1日

発行 大和文華館